H-2

トゥバ語の証拠性を表すとされる接辞-*dir* の機能：話し手・聞き手の認識からの説明 *

江畑 冬生 （新潟大学）

1. はじめに

トゥバ語には，もっぱら主節述語に付加される接尾辞 *-dir*（異形態 *-tir* などを持つ）がある[1]．この接尾辞は，動詞述語文の述語にも名詞述語文の述語にも付加される．本発表では，名詞述語文に現れる接尾辞 *-dir* がどのような機能を持つのか明らかにすることを試みる．

接尾辞 *-dir* が動詞述語文に付加されることは頻度の点で高いわけではない．この接尾辞が付加された場合には，証拠性（推測・知覚・心理状態）に関わる機能を持つ（第 2 節で簡単に触れる）．

これに対し名詞述語文（形容詞述語文を含む）では，接尾辞 *-dir* が頻出する．接尾辞 *-dir* は，（語用論的な差異を無視すれば）いかなる名詞述語文にも現れうる．Anderson and Harrison (1999: 89) では，この接尾辞は断定または証拠性 (assertive or evidential) の機能を持ち，非動詞述語文においては義務的であると記述される[2]．しかし発表者の調査によれば，接尾辞 *-dir* を決して用いてはならないような語用論的状況が確実に存在する．本発表ではこの接尾辞の機能を，語用論や談話の観点から解明する．結論として，接尾辞 *-dir* は名詞述語文において**義務的ではない**こと，接尾辞 *-dir* は証拠性ではなく**話し手・聞き手の認識から説明すべき**であることを主張する．

2. 動詞述語文における接尾辞 *-dir* の証拠性機能

本節では，動詞述語文における接尾辞 *-dir* の用法について簡単に確認しておく．前節でも述べたように，動詞述語文における接尾辞 *-dir* の出現頻度は高くない．ただし接尾辞 *-dir* は，様々な動詞形式に付加することが可能である（Isxakov and Pal'mbax (1961: 373, 383); Ooržak (2012), Ooržak (2014: 87-95, 113-122)）[3]．接尾辞 *-dir* が動詞述語文に付加された場合には，推測や視覚以外の情報といった証拠性に関わる機能を持つ．例文 (1) および (2) は，接尾辞 *-dir* の推測用法である（なおトゥバ語の名詞述語は，1・2 人称の場合にのみ主語標示コピュラを伴う）．

(1) *eki* *düš* *düže-en-**dir** =sen,* *ogl-um*
good dream dream-PST-DIR =2SG son-POSS.1SG
「お前は良い夢を見たようだね，息子よ」

---

* 本発表の内容は，2017 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会（2018 年 3 月 29 日，京都大学ユーラシア文化研究センター）における発表内容を発展させたものである．本発表中の例文は，特に断りのない限り，発表者によるフィールドワークまたは発表者の作成したトゥバ語コーパス資料（トゥバ語新聞 *Шын* 紙の電子版における 2012 年 10 月から 2015 年 1 月の記事を元に作成）によるものである．本研究は，科研費（課題番号 17H04773 および 18H03578）の支援を受けたものである．

[1] トゥバ語は，ロシア連邦のトゥバ共和国を中心に話されるチュルク系の言語である．話者約 28 万人の大半はトゥバ共和国に居住するが，ロシア他地域，モンゴル国，中国新疆ウイグル自治区等にもそれぞれ数千人程度の話者が分布する．

[2] Isxakov and Pal'mbax (1961: 433) では，単にロシア語の есть（be 動詞に相当）に対応することが述べられるのみである．Harrison and Anderson (2006: 59) では，"an enclitic that indicates deixis, emphasis and also serves as a copula (verb)" と説明される．

[3] 発表者の調べた限りでは，接尾辞 *-dir* は以下の動詞形式に付加しうる： *-(i)p* 副動詞形，*-a* 副動詞形，否定副動詞形，アオリスト形（肯定・否定），*-gan* 過去形（肯定・否定），*-bišaan* 継続形．これらの形式には定形も非定形も含まれるが，接尾辞 *-dir* が付加した場合には主節述語として振る舞うことになる．

(2) *dagïn* *emcile-p* *a-ar* *bol-gan-**dïr** =siler*
again see.doctor-CVB take-AOR be-PST-DIR =2HON
「あなたはもう一度医者にかかった方が良いようだ」

例文 (3) のように視覚以外の感覚により得られた情報や（Aikhenvald (2000: 65) の分類では nonvisual sensory に相当），例文 (4) のように心的状態を述べる際にも，接尾辞 *-dir* が現れる．

(3) *kuš-tar* *et-ken-i* *dïŋna-l-ï-**dïr***
bird-PL say-PST-POSS.3 hear-PASS-CVB-DIR
「鳥たちの鳴き声が聞こえる」

(4) *kandïg* *nom* *al-ïksa-y-**dir** =siler*
which book take-DES-CVB-DIR =2HON
「あなたはどんな本を買いたいですか？」

3. 疑問詞疑問文における接尾辞 *-dir* の語用論的機能

動詞述語文の場合とは対照的に，名詞述語文では，接尾辞 *-dir* は極めて頻繁に現れる．第 1 節でも述べたように，Anderson and Harrison (1999: 89) はこの接尾辞を義務的なコピュラ要素 (“quasi- or emerging copular form ... obligatory in sentences that lack verbs”) であると見なしている．しかしこの考え方では，以下で示すような接尾辞 *-dir* の語用論的機能を説明することが不可能である．本節ではまず疑問詞疑問文に注目し，接尾辞 *-dir* の機能の説明を試みる．

疑問詞疑問文では，接尾辞 *-dir* が現れる場合と現れない場合がある．本発表では，疑問詞疑問文における接尾辞 *-dir* の使用に関して次のルールを提案する．

> 接尾辞 *-dir* は，疑問文への答えが聞き手の知識から得られると想定されるときには現れない．接尾辞 *-dir* は，疑問文への答えが聞き手の知識からは得られないと想定されるときに用いられる．

例文 (5a) では，話し手は「聞き手が答えを知っている」と想定している．一方 (5b) は，話し手と聞き手がその答えを共に考えなければならない状況で用いられる．

(5) a. *bo* *čü-l*
this what-WHQ
「これは何？」

b. *bo* *čü-**dür***
this what-DIR
「これって何だろう？」

時刻を尋ねる際，接尾辞 *-dir* はほとんど常に現れる．これも先のルールにより説明可能である．現在時刻を知識として知っている人はふつういないからである．(6a) に答える際，（腕時計を見るなどの行為により）時刻を確認する必要があるため，(6b) も接尾辞 *-dir* を含むことになる．

(6) a. *am* *kaš* *šak-**tür*** b. *am* *üš* *šak-**tür***
now how.much hour-DIR now three hour-DIR
「今何時ですか？」 「今 3 時です」

一方で聞き手の知識を頼りにする疑問文では，接尾辞 *-dir* は現れない．これには (7) のように話し手が答えを知らない場合と，(8) のように話し手が答えを知っている場合（いわゆるクイズ疑問文）がある．

(7) *ad-iŋar* *kim-il*
name-POSS.2HON who-WHQ
「お名前は何ですか？」

(8) *bir* *šak-ta* *minut* *kaž-il*
one hour-LOC minute how.many-WHQ
「1 時間には何分ある？」

反語のように聞き手の知識の有無が関与しない場合にも，接尾辞 *-dir* は現れない．

(9) *kaynaar* *bar-zimza* *eki-l*
to.where go-COND.1SG good-WHQ
「私はどこに行けば良いのだろうか？」

4. 話し手の認識更新マーカーとしての接尾辞 *-dir*

第 2 節では，動詞述語文における接尾辞 *-dir* に証拠性が関わっていることを示した．名詞述語文では，推測用法はない．一見すると視覚以外の感覚が関わるように見えるのが以下の例である．

(10) *urug-nuŋ* *e'd-i* *izig-**dir***
child-GEN body-POSS.3 hot-DIR
「子供の体が熱い」

(11) *tokio-da* *sook-**tur***
Tokyo-LOC cold-DIR
「東京は寒いなぁ」

しかしながら名詞述語文における接尾辞 *-dir* の使用においては，情報入手経路は無関係である．例えば (11) は，実際に戸外で感じ取った場合にも単に気象ニュースで知った場合にも用いることができる．重要なのは，「東京は寒い」ことを**話し手が新たに認識**したという点である．本発表ではこれを**認識更新**と呼ぶ[4]．ただし話し手が経験的知識として「東京は寒い」ことを知っている場合には，接尾辞 *-dir* を欠く文を用いることが可能である．

[4] 本発表の「認識更新」は，田窪 (2010) の談話管理理論による「知識状態の更新」と同じ意味で用いる．

例文 (12) が普通は成立しにくいのは，自分自身が存在することは予め知っているはずだからである．しかし特別な語用論的状況を作れば，認識更新が発生し (12) も成立することになる．

(12) *(men)* *bar-**dïr** =men*
(1SG) existent-DIR =1SG
「(?? 私はいる） / 私の名前がリストにある」

一方で (13) や (14) のような普遍的真理やことわざでは，単に話し手の知識から述べられ認識更新が起こらないため接尾辞 *-dir* を含まない文が現れる．

(13) *on* *kazï-ïr* *beš* *bol-ur-u* *beš*
ten minus-AOR five be-AOR-POSS.3 five
「10 引く 5 は 5」

(14) *köš-ken-de* *teve* *xerek* *čok,* *keš-ken-de* *xeme* *xerek* *čok*
move-PST-LOC reindeer need not cross-PST-LOC boat need not
「移動した時にはトナカイは不要，渡河した時には船は不要」

5. 疑問文における認識更新

前節で検討した疑問文の場合も，応答のための認識更新がある場合には接尾辞 *-dir* が現れるのだと説明可能である．疑問文における認識更新は，疑問文を発する直前あるいは直後に行われる．本節では肯否疑問文の例を示すことにする[5].

(15) *amdannïg-**dïr** =be*
delicious-DIR =Q
(何かを食べた人に)「おいしいでしょう？」

(16) *mïnda* *častïrïkg* *bar-**dïr** =be* *xïna-p* *kör*
here error existent-DIR =Q check-CVB see(IMP.2SG)
「ここに間違いがある？ 確かめてみて」

肯否疑問文においても，話者の知識から応答可能な（認識更新が不要な）場合には接尾辞 *-dir* が現れない．

(17) *aymaa-ŋar-da* *baškï-lar* *bar =be*
tribe-POSS.2HON-LOC teacher-PL existent =Q
「あなたの一族のうちに教師はいますか？」

[5] (15)のように肯否疑問文における接尾辞 *-dir* が疑問文を発する直前の認識更新と関わっている場合，日本語のダロウにおける「確認要求」の用法と似ている（森山 (1992)）．

6. 聞き手の認識更新マーカーとしての接尾辞 *-dir*

接尾辞 *-dir* には，話し手の認識更新だけではなく聞き手の認識更新と関わる場合も存在する．(18) や (19) のように，聞き手に説明を行う場合にも接尾辞 *-dir* が現れる．これらの場合，話し手の側には認識更新が起こっていない．

(18) *bo* *me-eŋ* *bažïŋ-da* *telefon-um-**dur***
this 1SG-GEN house-LOC telephone-POSS.1SG-DIR
（名刺を差し出しながら）「これは私の自宅電話番号です」

(19) *bažïŋ-ïvïs* *bo-**dur***
house-POSS.1PL this-DIR
「私たちの家はこれです」

ただし接尾辞 *-dir* は，(20a) のように単に命題を伝える場合には現れない．(20b) のようにまず談話上で認識対象が把握されており，それに対する聞き手の認識更新が生じた場合に必要とされる．

(20) a. *me-eŋ* *ad-ïm* *čoygaana*
1SG-GEN name-POSS.1SG Choygana
「私の名前はチョイガーナです」

b. *čoygaana-**dïr***
Choygana-DIR
（電話で）「チョイガーナです」

このように接尾辞 *-dir* は対話における話し手・聞き手の認識に関わって用いられる形式であるので，非対話的な場面では出現しないことになる．初めに引用形式を比べると，(21) のように単に内容を述べる際には接尾辞 *-dir* は現れないが，(22) のような発言内容の直接引用ならば現れうる．

(21) *ayana* *čüü* *dep* *xarïïla-ar-ïl*
Ayana what QUOT answer-AOR.3-WHQ
「アヤーナは何と答えた？」

(22) *ogn-uŋ* *kandïg-**dïr*** *dep* *aytïr-ar*
son-POSS.2SG how-DIR QUOT ask-AOR.3
「『息子さんはいかがですか？』と尋ねる」

物語中の名詞述語文にも，接尾辞 *-dir* は現れない．次の (23) のうち下線部が名詞述語である．この一連のテキスト中，接尾辞 *-dir* はメタ的情報を示す冒頭の一文にしか現れていない．やはり接尾辞 *-dir* は，基本的に非対話的談話には現れないことが分かる．

(23) [1] *šaanda bolgan čüve-**dir***. [2] *čaynïŋ končug izig üezi*. [3] *a't kulaa közülbes karaŋgï*. [4] *arga ištinde čaylagda čaŋgïs ög*. [5] *ögde dunun božuur četken čalïï kïs bile šuvagančï kïrgan avadan öske, kïm daa čok*. [6] *arganïŋ düneki amïdïralïn kamgalakčï burgan xaygaarap organ*.

「[1] 昔あったことだ． [2] 夏のとても暑い時． [3] 馬の耳が見えない暗さ． [4] 森の中の夏営地にたった一軒のテント住居． [5] テントには初産を迎えつつある若い娘と老婆のほか，誰もいない． [6] 森の夜の生活を守護者たる神が見守っていた．」

7. 結論と課題

トゥバ語の接尾辞 *-dir* は，動詞述語文と名詞述語文で異なる機能を持つ．動詞述語文では証拠性の機能を持つ．名詞述語文では談話における語用論的な説明が必要で，話し手または対話の聞き手により認識更新が行われる場合に用いられる．

本発表で扱ったトゥバ語の接尾辞 *-dir* と同様の機能を果たす言語形式は，他のチュルク諸語には見られないようである．管見の限りでは，トゥバ語の方言（ジュンガル・トゥバ語）やトゥバ語に極めて近いとされる言語（トファ語・ソヨート語）には，本発表で扱った接尾辞 *-dir* に相当する機能は見られない（Rind-Pawlowski (2014), Rassadin (1978), Rassadin (2010)）．ただしこれらの方言や言語の研究においては，名詞述語文にあまり注目されていないことにも留意が必要である．

聞き手の持つ情報に配慮が必要な言語としては，日本語を対象とする研究が進んでいる．例えば日本語文法記述研究会 (2003: 197) では，日本語の「のだ」の基本的性質のうち，「聞き手への提示」「話し手の把握」の両方を示している点が興味深い．日本語を含めた他言語との対照については，今後の課題としたい．

略号

AOR: aorist, COND: conditional, CVB: converb, DAT: dative, DES: desiderative, DIR: the suffix *-dïr*, GEN: genitive, HON: honorific, IMP: imperative, LOC: locative, PASS: passive, PL: plural, POSS: possessive, PST: past, Q: question, QUOT: quotation, SG: singular, WHQ: wh-question

参考文献

Aikhenvald, Alexandra Y. (2004) *Evidentiality*. Oxford/New York: Oxford University Press.

Anderson, Gregory D. and K. David Harrison. (1999) *Tyvan*. München: Lincom Europa.

Isxakov, F.G. and A.A. Pal'mbax. (1961) *Grammatika tuvinskogo jazyka. Fonetika i morfologija*. Moskva: Izdatel'stvo Vostočnoj Literatury.

Ooržak, Bajlak. (2012) *Die parzeptive Verbform -AdIr im Tuwinischen*. Marcel Erdal, Irina Nevskaya and Astrid Menz (eds.) *Areal, historical and typological aspects of South Siberian Turkic*. 91-96. Wiesbaden: Harrassowitz.

Ooržak, B.Č. (2014) *Vremennaja sistema tuvinskogo jazyka*. Moskva: Jazyki slavjanskoj kul'tury.

Rassadin, V.I. (1978) *Morfologija tofalarskogo jazyka v sravnitel'nom osveščenii*. Moskva: Nauka.

Rassadin, V.I. (2010) *Soyotica.* (*Studia Uralo-Altaica, 48*). Szeged: University of Szeged.

Rind-Pawlowski, Monika. (2014) Evidentiality in Dzungar Tuvan. Pirkko Suihkonen and Lindsay J. Whaley (eds.) *On diversity and complexity of languages spoken in Europe and Northern and Central Asia*. Amsterdam: John Benjamins. 339-377.

高島 尚生 (2008)『トゥヴァ語基礎例文 1,500』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

田窪 行則 (2010) 『日本語の構造 推論と知識管理』 くろしお出版.

日本語記述文法研究会（編）(2003) 『現代日本語文法 4 モダリティ』 くろしお出版.

森山 卓郎 (1989)「認識のムードとその周辺」仁田 義雄・益岡 隆志（編）『日本語のモダリティ』くろしお出版．57-120.

森山 卓郎 (1992) 「日本語における「推量」をめぐって」 『言語研究』第 101 号, 64-83.